

多言語・多文化を介した「惑星思考（プラネタリティ）」の実践

岡和田晃

圧政に対して「文学」をもって抵抗するのは、無意味な自己満足にすぎないのではないか——そうした通念を、軽やかに飛び越えてなされたのが、フランスペンクラブ主宰で 2024 年 1 月 21 日に開催された、「Global Poetry Night: A Stand Against Tyranny and Darkness in Afghanistan」だろう。

フランス PEN は『詩の檻はない』の企画を、作品の募集段階から応援しており、それは私も「茨城新聞」2023 年 8 月 27 日号に書いたことがある。同クラブの新会長に就任されたキャロル・メスロビアンさんは、『詩の檻はない』のフランス語版『Nulle prison n'enfermerait ton poème』にも寄稿なさっており、フランス PEN が総力を結集してこのイベントに携わっているようで、「文学」を僭称した冷笑主義的な反動性に日頃から接している身からすると、胸がすくように痛快な思いを抱いた。

2023 年 12 月 19 日に横浜・寿で開かれたソマイア・ラミシュさんの来日を歓迎するシンポジウムの記録が「ウェブ・アフガン」で公開されたのを紹介したら、瞬く間に世界各地の詩人からあたたかい声が届いた。「普段は使わない翻訳ソフトで読んだ」という声もあったくらいだから、相当な熱量があったとわかる。いまは日本語でイベントの記録をしても、すぐに世界へと伝わる時代になっているのだ。

今回のイベントで画期的だったのは、獄中作家・人権委員会委員長中島京子さんより連帯のメッセージが寄せられたこと。アフガンの詩の禁止に詩作を通じて抗う企画が立ち上がった当初は、野口壽一さん経由で日本ペンクラブにも話が行ったものの、門前払いに遭ったという。しかしながら、私はペンクラブに知り合いがいたので、そうした協力者の方々経由で各地の文学運動を伝えたところ、やがて盛田隆二さんや鴻巣友季子さんなど、支持を公言してくださる会員の方々も出てくるとともに、日本 PEN の公式 SNS やウェブサイトにも声明が出る結果となったのである。

実際のイベントは、落ち着いた雰囲気が進められた。日本時間で朝 4 時と早朝（というより深夜）から開催され、だいたいの出演時間にログインすればよい仕組みだったが、日本側の代表者である柴田望さんや、12 月 19 日のイベントのパネリストでもある佐川亜紀さん、そして『詩の檻はない』の寄稿者・葉山美玖さんが最初から参加しておいでだった。

私は葉山さんから「体調に自信がないので、代わりに詩を朗読してほしい」という依頼を事前に受け、運営サイドの諒解も得ていた。というのも、葉山さんの詩「澄んだ湖」を英訳したのは私だったからである。『詩の檻はない』に集められた詩は、もともと英語をベースに募集されたもの。もちろん日本語のみで参加した詩人もいるが、私自身、自作は英語で書き下ろしたし、詩が本質的に翻訳不可能なものであるにしても、入り口が多いに越したことはない。葉山さんから翻訳のご依頼をいただいた際は一面識もなかったが、いただいた詩を一読し、海外への紹介に値する内容だと確信したことが思い出される。

「澄んだ泉」の原文と英訳版「The Clear Lake」は、「とんぼ」第十七号（文治堂書店）に掲載された。関係者の許諾を得て、全文をここに紹介したい。

【こちらに全文を入れてください】

くださしい解説は蛇足だろう。シンプルで輪郭のはっきりしたイメージに、末尾のメッセージがうまく見合っている。根底に優しさをたたえながら日本的抒情に流されない。訳し終え、自分の受け持つ大学や専門学校での講義で本作を紹介してきたが、そこで感じたのは、本書がやろうとしていることは、ユリー・シュルヴィッツ 作・画『よあけ』（瀬田貞二訳、福音館書店）に近いのではないかということだった。同書については、「翻訳家による「はじめて出会う世界の絵本」」という書店フェアのために推薦文を書いたことがあり、そちらを参照していただきたいが、朗読の前にはこの絵本のことにも実際に触れた。

【ここに「よあけ」の推薦文を入れてください】

私は日本語での詩の朗読については、それなりに場数を踏んできたから自信があるものの、英語での朗読には――発音の観点からの――苦手意識は否めない。にもかかわらず、背中を押していただいた葉山美玖さん、そして日本側の出演者を取りまとめた柴田望さんに改めて感謝したい。

「澄んだ泉」(The Clear Lake) を私が日本語と英語で読んだあと、『Nulle prison n'enfermera ton poème』の監訳者セシル・ウムアニさんがフランス語で同作を読んでくださった。言葉そのものの美しさが染み込むようで、まるで違和感がない。稀有な経験をしたと思ったら、葉山さんも深く感銘を受けておいでの様子だった。

この手のイベントは時間が「押し」気味なのが常であるが、多数の参加者がいたのに「巻き」になり、私は自作詩を朗読する機会もいただくことができた。このときは英語詩「The Death of Democracy」（「壘」Vol.16、壘の会／有限会社ネオセントラル）を先に読み、後者を後で読んでみた。なんとも微笑ましいハブニングも起きたのだが、それは参加者だけの胸に秘めておいてもらいたい。

【ここに「The Death of Democracy」を入れてください】

拙作については、キャロル・メスロビアンさん直々にフランス語版を読んでくださった。またとない光栄としか言いようがないが、言語と読み方で同作にある風刺詩としての感触が変わるのは嬉しい発見だった。

総じていえば、平和と愛をたたえる終始和やかなイベントで、日本での詩のイベントがそうであるように手作り感にも満ちていた。にもかかわらずそれ自体が、アフガニスタンで苦しむ人民に連帯し、ターリバーンの圧政に抗するまたとないメッセージになるのは不思議と思う。「コスパ」という言葉は新自由主義的で好きではないが、あえて逆用すれば、「コスパ」のよい抵抗だと言い換えることもできようか。

冷笑や同調圧力とは異なる「文学」を通した連帯があること――それをスピヴァクの言う「惑星思考（プラネタリティ）」の実践として伝える試みのひとつ。「Global Poetry Night: A Stand Against Tyranny and Darkness in Afghanistan」は、そう批評的に位置づけることが

可能だろう。